生真面目な滑稽①

高橋真紀子

花鳥諷詠を唱え、滑稽とはあまり縁がなさそうに見える高浜虚子が、晩年に興味深い見解を語っている。「滑稽は、人生に欠くべからざるものですから。滑稽な句も、たまたま我々の中で出来るのも当然であろうと思います」

「真面目な凝視のうちに自ずから生まれ来るものに本当のユーモアはあります。そんなところにも写生というものがあると思いますね」

近代以降、歴史に名を残した俳人の多くを「滑稽俳人」と呼ぶことはできないが、滑稽句を詠んでいない俳人もいない。生きていると、ここかしこに滑稽が潜んでいて、真剣な観察や写生によって掘り起こされるのかもしれない。

ならば「近代俳句の父」正岡子規にも、滑稽が見えるだろう。

晩年の子規は、病の激痛に苦しみながらも「病牀六尺」を奔放に生きたと思う。まず食欲。間食に菓子パンを十個も食べたり、小包で届いた鴫三羽を一人で平らげたり（二羽は母と妹律の分だと思うのだが）凄まじかった。その一方で、医者が命の期限を明言してくれれば、我がまま贅沢が言えて楽と、ぼやく。また、看護に明け暮れくれた律のことは、頼りに思っているのに、強情で気が利かないとぶちまけた。そして、家族の留守中に自殺を考えた時は、苦悶して泣き、凶器の刃物を描いている。

子規は晩年の自分を詳細な文章や俳句に残したが、滑稽句も数々詠んでいる。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

十年の苦学毛の無き毛布哉

病人に鯛の見舞や五月鳴の秋

成仏や夕顔の顔へちまの屁

その究極の作が「絶筆三句」であると私は思っている。

糸瓜咲て痰のつまりし仏かな

痰一斗糸瓜の水も間にあはず

をとゝひのへちまの水も取らざりき

一連の句は亡くなる半日ほど前に書かれた。糸瓜を題材に、自らの死を日常の一コマのように写生したさまには、子規の覚悟を感じる。と同時に、死を目前にしてなお徹底される観察眼に、私はある種のおかしみを感じるのだ。

一大事である人の死も、大宇宙の命の流れの中では、取るに足らない日常だ。この悲しくも滑稽な現実に、向き合うように残された絶筆三句は、鑑賞者の心を見事に揺り動かす。

写生とは、命の営みを切り取る作業であり、真剣な写生には命の輝きと滑稽が見えてくる。

※主な参考文献　「俳句への道」（虚子著）、「子規句集」（虚子選）、「仰臥漫録」（子規著）、「病牀六尺」（同）

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。